【朝夕刊月ぎめ定価3925円（本体価格3738円＋消費税187円）】1部売り朝刊130円・夕刊50円　（第三種郵便物認可）

ひと ヒト 人物語

父が師 福祉農園

兄の良太さん（右）と一緒にハーブを刈り取る浩平さん（左）。作業の様子を父の良一さんが後ろで見守る（さいたま市緑区の『見沼田んぼ福祉農園』で）＝関口寛人撮影

作業着姿の猪瀬浩平さん（29）が足元をまじまじと見つめた。床板の所々に穴が開いている。

今月12日。さいたま市の「見沼田んぼ福祉農園」で、倉庫として使っている小屋の修繕作業が行われた。全体が傾き、出入り口の戸も開けにくくなっていた。

「こんなに腐っていたなんて」。そうつぶやいた浩平さんの後ろで、父、良一さん（58）の声がした。「これほど長く続くとは思わなかったもんな」

父が開いた農園は今年、10年目を迎えた。

浩平さんの兄の良太さん（34）には知的障害がある。農業ジャーナリストだった父が、地元の農家から小さな土地を借りたのは20年前。良太さんに農作業を経験させるのが目的だった。

浩平さんが小学生だった時は週末ごとに家族と通った。深い森や漆黒の夜。そこには別世界があった。

だが、中学に入ると、部活動や友人とのつき合いが忙しくなって足が遠のいた。家族との距離を感じ始めたのは、高校に進んだころからだ。同級生から、父の仕事や兄について聞かれると、どう説明していいか分からなかった。

家族とほとんど口をきかなくなり、生まれ育った土地から離れた大阪大の人間科学部への進学を決めた。

大学2年になった1999年5月。父は農場を1ムに広げて福祉農園を始めた。それまでは家族だけで農作業をしていたが、障害者やボランティアを受け入れるようになった。

夏休みに帰省すると、「農園で草むしりをやれ」と父に言われた。避けてきた相手だが、有無を言わせぬ口調に従うしかなかった。

その後も帰省の度に農園の仕事を手伝わされた。初めの何年かは苦痛でしかなかったが、渋々手伝っているうちに、農業というものが少しずつ違って見えるようになっていった。

そんな自分を初めて意識したのは、東大大学院に進むため埼玉に戻った2001年の春だった。

ジャガイモを作ろうと、種芋を4分の1に切って植えた。本当に芽が出るのかと半信半疑だったが、2週間後、緑の葉がぽつぽつ顔を出し始めた。畑が新芽で埋まったのは、その1週間後だ。あんな切れ端から、こんなに多くの芽が育つとは……。生命の神秘を目の当たりにした思いだった。

失敗も繰り返した。

雨の翌日に耕運機をかけ、すっぽりと泥に埋もれたことがある。農薬を使わずに枝豆を育てようとして、新芽をすべて青虫に食べられたこともある。そんな経験を重ねながら、苗が実った時の感動は何物にも代え難いと知った。

翌年の1月。子供らにも農業に触れてもらおうと、農園の一区画で農作業の体験教室を開き始めた。しかし、教室の準備に追われるなどして本来の農作業がおろそかになり、畑は雑草だらけになってしまった。

この時に意見したのは父だった。「知識も技術も十分じゃないのに、子供を受け入れるのは早過ぎる。まずは地道に農業と向き合うべきなんじゃないのか」

その通りだと思った。農業だけでなく父を見る目も徐々に変わっていった。

農園から発電機や耕運機がごっそりと盗まれたのは一昨年5月のことだ。そろえ直す経済的余裕はなく、「もうダメかも知れない」と気持ちは沈んだ。

だが、思いがけないことが起こった。地元の農家や企業から、中古品や現金を寄付したいという申し出が約40件も寄せられたのだ。

父とお礼に回り、地域の人々が障害者や若い農業者に向けるまなざしの温かさを実感した。農園のことで、父と一緒に怒ったり笑ったりしている自分がいた。

昨年春からは明治学院大で「ボランティア学」を教えている。秋には学生を農園に連れて来て農作業を体験させた。若い人に伝えたいのは「人と人をつなぐ農業の素晴らしさ」だ。

農園では今、約200人の障害者や若者が汗を流す。10年目を迎え、父にこう提案した。

「これからは採算のとれる方法も考え、農園を何世代にもわたって続けられる体制にしたい」

小屋の床板を張り替えた後、農園のかまどでおでんを作った。具のジャガイモや大根は農園で採れたものだ。汁をすすると、冷えた体がほんわり温かくなった。鍋から立つ湯気の向こうに、満足そうに笑う父が見えた。

（朝来野祥子）

最初は渋々 ■ 「人つなぐ喜び」知った10年

福祉農園では今、長ネギが収穫の時期を迎えている